

## ストラボンのモーセと

### ユダヤ社会に関する叙述について

田 中 穂 積

#### はじめに

『地理学』（十七卷）の著者アマセイアのストラボン（前六四／三―後二二年頃）がストア的見方に立つ史家であり、地理学者であったことは、彼自身の表現から知られる<sup>1)</sup>。そうした彼の立場は、またモーセに関する彼の叙述からもうかがうことができる。ストラボンは、他の多くのギリシア人文筆家と同様にモーセをユダヤの立法者とするが、反ユダヤ主義の風潮がすでに高まっていた前一世紀後半においても、モーセを高く評価し、それもストア的観点を加味した、予言者としてのモーセ像を描き出した。この辺の叙述は『地理学』のなかでも、やゝ特色ある部分といえることができる。換言すれば、ローマ共和政末期の地中海世界の政治的混乱がアウグストゥスの統治において終結したのを是とするストラボンにとって、宗教的にもシンクレティズムの展開をみたヘレニズム思潮の中から醸成された、いわば汎神論的に統合された神を求めたということができ、彼が知りえたモーセとモーセの神がそうしたモデルの一例としてあげられているのである。

一 ヘカタイオスのモーセ観

——ストラボンの叙述検討の前提として——

ヘレニズム時代初期、ギリシア人による民族誌記述の傾向としては、宗教や社会習俗などの他に、政治形態、民族の起源、民族の特徴についての関心という三要素が加わるとする見方がある<sup>6)</sup>。ことに政治形態に関してはプラトンやアリストテレスの政体論の影響を受けたとおもわれるし、またその他の点については、ギリシア人の諸民族についての知識の拡大、ならびにそれらに対する関心が高まったことにある。ペリパトス派のテオプラストス、ソリのクレアルコス、ユダヤ人を哲学者と表現しており、またメガステネスもギリシア以外での哲学者はインドのブラーマンとユダヤ人であるという<sup>6)</sup>。これらの断片は別として、ストラボンのユダヤに関する叙述を取り上げるに際して、通称アブデラのヘカタイオスと呼ばれる史家に触れておく必要があるであろう。この史家の作品は散逸したが、主著の『エジプト史』は、知遇を受けたプトレマイオス一世の時代に書かれたとみられる。これがディオドロス『歴史文庫』第一巻の古代エジプト人に関する叙述の主要史料の一つとなった。そこにはユダヤ人がシリアとアラビアの間の地に移住したエジプト人植民とされている(Diod. I, 28)。しかし、ユダヤについてのより詳しい叙述は、同『歴史文庫』第四十巻のなかにみられ、ポテリオスの『文庫』に引用され現存している<sup>6)</sup>。これは、全てではないにしても、大体においてヘカタイオスの作品の写しとみてよからう。それがヘカタイオスの『エジプト史』、あるいは彼の他の史書、たとえば疑問視されている『ユダヤ史』からの転用なのかは不詳である<sup>6)</sup>。

ところで、ヘカタイオスの『エジプト史』は古代ファラオの統治が優れていたことを強調したとおもわれる。そこにはプトレマイオス一世がエジプト支配の当初において、エジプトの伝統を踏襲すべきことを示唆したとする見方、

他方、この王のギリシア人優遇政策に対する批判が込められているとする見方などがある。このことはまた、その著作年代とも関連し、早い時期では前三二〇—前三一五年、遅くは前三一二—前三〇五年という論議もみられるのである<sup>90</sup>。それはともかくも、プトレマイオス二世は、前一九年に一時パレスチナを占領し、その後、前三〇一年より同地域を支配した。この政治事情から、ヘカタイオスは古代エジプトの文化とともに、ヘブライズムの特徴に関心を深めたとみることが出来る。彼のユダヤに関する叙述には、先にあげた同時期のギリシア人の著述と同様に、反ユダヤ主義は表出していない。これと対照的に、プトレマイオス二世時代、ヘリオポリスの神官マネトンによる『エジプト史』には反ユダヤ主義がかなり濃厚に滲みでている (Joseph. C. Ap. II, 227-266)。但し、それがマネトン自身の表現か、後代の改竄かについては、問題のあるところである<sup>91</sup>。

それはともかく、ヘカタイオスの挙げるユダヤに関する特徴は次のようである。(一)エジプトには古くから異邦人が住んでいたが、彼らはエジプトの伝統的祭儀に従わなかったがゆえに、エジプト人に追放された。ダナオスとカドモスに率いられた者達はギリシアに移住し、モーセに率いられた者達はユダヤの地に定住したという。ここではギリシアにおける伝承が加味され、またギリシア人とユダヤ人が並列されている。(二)ユダヤ人はエルサレムを建設し、モーセは信仰と祭儀の掟を定めた。神とは地上を取り巻く天であり、宇宙を支配しており、造像でもって表象しえないとした。また祭儀と生活様式については、彼らがエジプトを追放された結果から、他民族と異なる祭儀、そして非社会的、非寛容的な生活様式を導入したとする。(三)政治形態に関して、立法者モーセはユダヤ人を十二部族に分け、祭司を任命し、彼らに法と慣習の擁護を委ねた。それゆえユダヤ人は王を戴かず、祭司のうち最も優れた者が大祭司となつた。彼らの各法の最後には、これはモーセが神から聞き、そしてユダヤ人に伝えられた言葉である、と付言されたとする。またモーセは若者を養育し、優秀な軍事指揮者として近隣を支配した。ユダヤ人は人口を殖やし、祭司階級を優遇したが、しかし富者が貧者を圧迫しないような共同体意識の堅持に努めた。しかし後代、ユダヤ人が他国の支

配、つまりペルシア人、次いでマケドニア人に従い、それらと交わるようになると、彼らの伝統的慣習は乱れた。

以上が順序を若干変更したが、ポティオスのあげるヘカタイオスの表現である。ここにみられるモーセ像がギリシアにおける立法者を反映していることは、従来指摘されてきたところである<sup>9)</sup>。たとえばプラトンによると、立法者は住民を十二部に区分し、そして財貨を平等に配分し（『法律』745D）、若者には訓練の必要があること（『国家』375C-D）、またアリストテレスにみられる神人同型の否定、天空と宇宙をもって神とみるという表現などである（『形而上学』1074a 33 ff.）。さらに、ディオドロスは『歴史文庫』第一巻でエジプトのムネウエス、サンユキス、ボッコリス等をエジプト以外のミノス、リュクルゴス、ザッラウステス、ザルモクシス、モーセ等と対比しているが（Diod. I, 94）、この表現がヘカタイオスに由来するとは明言できないにしても、問題のあるところである。というのも、後述するようにならばストラボンもモーセを論じるに当たって、幾人かの立法者をあげているからである。もっとも、ヘカタイオスがユダイズムを論じる際、そこにはギリシア的思考が反映しているとしても、彼が如何にしてモーセの伝説やユダヤ律法に関する資料を入手したかが問題となる。彼があげている「モーセは神の声を聞き、それをユダヤ人に伝えた」とする表現について、諸家は『申命記』また『レビ記』の箇所を求めようとしている<sup>10)</sup>。この点、ヘカタイオスは律法書について何らかの知識を持っていたとおもわれる。しかし、当時『七十人訳』はまだ完成されていなかったとみてよい<sup>11)</sup>。プトレマイオス一世が多数のユダヤ人をエジプトに連行した時期を前三一九年のパレスチナ侵攻のときとすれば<sup>12)</sup>、早くからアレクサンドリアにかなりのユダヤ人が居住したとみることができ、彼らのコミュニティの間で次第にインフォーマルな五書のギリシア語訳が利用されたとおもわれる。そのような環境からヘカタイオスはユダイズムに関する知識をえたとみてよからう。

## 二 ストラポンの叙述とその問題点

ストラポンはユダヤに関する地誌を述べたあと、彼はモーセと後のユダヤ社会を余談風に次のように取り上げている（第十六卷二章三四節以下）<sup>(34)</sup>。

[34] ヒエロソリユマ（エルサレム）の神殿に関する最も有力な伝承によれば、いまユダヤ人と呼ばれている彼らの先祖はエジプト人であったと信じられている。

[35] すなわち、モーセースはエジプト人神官の一人であって、下エジプトと呼ばれる地域に居たが、彼はそこから（ユダヤに）移住した。つまり彼は（エジプトにおける）慣習を嫌い、神を信じる多くの者達を伴って、そこを離れたのである。というのは、彼は次のようなことを話し、説いたからであった。すなわちエジプト人が動物や家畜を崇めているのは、神を正しく理解していないのであって、リビア人もまた同様である。なおギリシア人が人間の姿でもって神を表したのも正しいことではない。神とは、われわれ全てや陸海を包含する唯一なるものであって、いい換えればわれわれが天空や宇宙、あるいは存在する本質と呼んでいるものなのである。しかしながら、若し誰かがこれを彫像に表したいと願っても、われわれのうちに存在する何れに似せたものを心象することができようか。否、人々は如何なる彫像も造るべきではない。ただ神域と崇拝すべき神の座である神殿の設定は別である。良き夢を願う人々は、自分自身のためだけでなく、他の人のためにも神殿内で眠るべきである。自制心を持って正しい生活をしている者達は、常に神から何らかの祝福あるいはしるしを期待できるが、しかしそうでない者は同様なことを期待できないのである。

[36] さて、モーセースはこのようなことを述べることによって、思慮あるかなりの人々を説得し、いまヒエロソリユマ

ストラポンのモーセとユダヤ社会に関する叙述について

があるその地に彼らを誘った。この場所を彼は容易に手に入れることができた。というのも、ここが人々の羨望的になる程のものでもなかったし、また是が非でも争って占領しようという程のものでもなかったからである。そこは岩肌地であり、その場所自体は水の確保に恵まれているものの、まわりの領域は荒地で水がなく、また半径六〇スタディアの地表は岩肌地である。それでモーセースは軍備を整える代わりに、神を崇拜すべき場所を設定したり、また費用をかけ、神的妄想をもったり、不合理な愚かしさで崇拜や祭儀を執り行ってきた人々を圧迫しないようなある種の仕方を約束したりして、彼の勧める供犠や彼の神を提唱した。このゆえにモーセースはこの人達にはなほだ賞賛されたので、通常みられない政体を組織した。そして周辺の全ての人々がモーセースの下に唯々として集まったのも、彼がそうした人々に将来の見込を抱かせたからであった。

[37]彼の後継者達は、しばらくの間は正しい行いと神に対する全き敬虔によって、同じ道を歩んだ。しかし後になると、まず初めに迷信を信じた者達が祭司職に、次いで専制支配者達が祭司職に任命された。迷信から食物に関する禁止事項がつけられ、それが今日に至る慣習となっており、また男女の割礼やその他遵守すべき事柄が生じた。また専制支配者から盗賊の集団があらわれた。そのうちある者達は反乱を起こし、彼ら自身の国や近隣の国々を荒した。他方、支配者と結託した者達は他人の財産を強奪し、シリアやフェニキアの多くの地域を支配下においた。しかし彼らはなお自分達のアクロポリスを崇敬していた。その理由は彼らとその場所を支配の座として嫌わなかったということではなく、聖所として崇め、かつ尊敬していたからであった。

[38]つまり、このような事は自然に起こることであり、それがギリシア人とバルバロイに共通することなのである。というのは彼らは国家を形成しているゆえに、共通の命令に従って生活しているからである。というのも、そうでなければ如何なる国においても、そこにいる民衆の集団が互に調和しながら一つのまた同じ事をなしたり、——それは自由な国家における生活を意味しているのであるが——あるいは如何なる別の方法であれ共通の生活をなすこと

は不可能になると思われるからである。その命令とは二重性を有している。つまり、そうした命令とは、神々また人間のいずれかより発せられるということである。古代の人々は少なくとも、より深い尊敬と崇敬の念をもって神々からの命令をえていた。この点、神託に頼った人について当時の多くの証拠をあげることができる。「高く繁った樅の木からゼウスの神意を聞くために」ドドナに走った人々、彼らはゼウスのよき助言を求めたのである。また「瀕死の子供が最早や生き延びられないか、どうかを尋ねるために」人々はデルポイに走ったが、しかし子供自身は「自分の両親を探そうとしてポイボスの家に向っていた」。クレタ人のうちミノスは、「九年目には偉大なゼウスと親しく交わった王であった」。九年毎に彼はゼウスの洞に行つてゼウスから法を受け取り、それを人々に示したとプラトンが述べている。また、彼と張り合つたりユクルゴスは同様なことをなした。つまりよく知られているように、ピュティアにどのような布告がよいかを尋ねるために、しばしば国を出て行つたが、その神託をラケダイモン人に知らせるのが彼の務めであった。

[39]ところで、これらのことがどれ程まで真実であつたかは別として、いままで人々に信じられ、是認されてきた。この理由のゆえに、予言者達も尊敬され、また王にとって価値ある者と思われた。それは、彼らが生存中だけでなく、また死んでも神々からの命令や修正をわれわれに伝えたからである。たとえば、テイレシアスであるが、「彼の死後においても、ペルセポネは彼のみが理解する力を持つことを許し、他の者は影のように飛び交うだけである」。かかる人達は、またアンピアレオス、トロポニオス、オルベウス、ムサイオス、それにピュタゴラス派の一人で、昔ゲタイ人の間で神であつたザモルクシス、われわれの時代ではビュレピスタスの占者デカイネオス、ボスポレニ族の間ではアカイカロス、インド人の間ではギュムノソフィスト、ペルシア人の間ではマゴスと巫術者、それに一般にいわれているように皿占者と水占者であり、アッシュリア人の中ではカルデア人、ローマ人の中ではテュレニアの占星者である。モーセースはこのような人物のうちの一人で、また彼の後継者達もそうであつた

が、初めは悪くはなかったが、より悪しく変化していった。

[40]さて、ユダヤが専制支配者の下におかれると、アレクサンドロスがまず祭司に代わって王と称した。ヒュルカノスとアリストブロスの二人は彼の子供であった。彼らが支配争いをしたとき、ポンペイウスが乗り込んできて、彼らを降してその要塞を破壊し、ことにヒエロソリユマそのものを武力で占領した。というのも、それは岩地に堅固な城壁を構築した要塞であった。内部には十分な水が貯えられていたが、外部には水が全くなかった。それは、岩を深さ六〇歩、幅二六〇歩にわたり切り取った壕があり、切り出された石を用いて、塔を持つ神殿壁が巡らされていた。ポンペイウスは、ユダヤ人が全ての仕事を休む断食の日を選んでこの都市を攻略したといわれる。彼は壕を埋め、そこに梯子を立て掛けたのであった。さらに彼は城壁の全てを破壊することを命じ、出来るかぎり盜賊の巢窟や専制支配者の財庫を取り潰した。これらのうち二つはヒエリコスへ至る道筋にあるトレクスとタウロスであり、他のものはアレクサンドリオン、ヒュルカニオン、マカイルス、リュシアス、そしてプイラデルプイア近隣の幾つかと、ガリライア近隣のスキュトポリスであった。

このように、ストラボンはモーセの神の見方と彼の率いる共同体の形態、エルサレムの地形、後代におけるユダヤの迷信的慣習を取り上げ、次いで神託と国制、またト占を論じ、それらにモーセを関連づけ、その後でストラボンの時代におけるユダヤ史を取り扱っている。この箇所は、ディオドロスの『歴史文庫』にみえる、先述のヘカタイオスのユダイズム論と同様にポンペイウスのユダヤ征服に合わせておかれている。

まず、[35]の冒頭でストラボンはモーセを下エジプトにおけるエジプト人神官としている。この出生に関しては、ヘカタイオスの表現と異なっており、むしろヨセフスがあげている反ユダヤ主義者達の主張と同じである。後代になれば、史家タキトウスもあげているように、モーセの出生については多様な見方があらわれている (Tac. Hist. 5, 3)。



次にストラボン、モーセがエジプトの慣習を嫌い、自らエジプトを離れたとする。その理由として、モーセの神についての見方をあげる。その際、神は動物や人間の形をもって表象できないとし、そしてヘカタイオスがモーセの箇所で触れていたように、神とは地上を取り巻く天空や宇宙であるとするが、それに加えて存在する本質であるとする。このストラボンによる付加的表現がストアの見方であることは、従来指摘されてきたところである。しかしそれが、つまり延いてはストラボンのユダイズム論がポセイドニオスに負うとするラインハルトやハイネマン等の見解には問題があろう<sup>99</sup>。

次に夢と神の関係があげられている<sup>100</sup>。広く古代オリエントでは、ことに支配者が特権者として夢で神託を授けられている。しかしストラボンの表現では、聖所で良き夢を願うということである。聖所で夢をみるという行為は、古代世界で広く行われており、その目的が神託をえるため、あるいは病の治癒のため、そしてそれが自身だけでなく他人のためとしても、神の意志の現れを期待するものである。ことにモーセのように神像を否定する場合、神との邂逅は夢の介在を必要とし、そこから存在する本質たる神の摂理を会得すべきである、とストラボンは理解したとみてよい<sup>101</sup>。また同時に正しい行いと神の祝福が一致するということは、当然ながら神は善を望むからに他ならないのである<sup>102</sup>。

[36]では、まずエルサレムの地理的条件があげられている。この描写は前二世紀後半のティモカレスの叙述に似ており、彼はエルサレムが周囲四〇スタディアあり、周りは崖縁となっており、都市から四〇スタディアに及ぶ範囲は水がないが、都市における水の確保は十分であるとしている<sup>103</sup>。もともとエルサレムに関する記述は他にも多くあったとおもわれる。ストラボンの場合には、この場所が人々の欲するような土地でなかったとしており、そしてヘカタイオスがモーセを軍事指揮者としているのと対照的に、モーセが軍備を整える代わりに、この地に神殿を設けたと表現している。さらに崇拜の方法については、多額の費用を掛けず、また不合理な狂信的祭儀を執り行わないように努め、独自の政体を組織した。それゆえモーセは近隣の人々の信頼をえたというのである。ここにストラボンの立法者

モーセの捉え方がみられる。

[37]ではユダヤ社会の衰退と専制支配者による近隣への勢力増大があげられている。ストラボンはモーセが組織した政体には触れていない。しかし、祭司達が国政の中枢を占めたとしており、その彼らが迷信を信じるようになったため、食物に関する規制や割礼などが制度化され、それがストラボンの時代にまで及んでいるとする。そして専制支配者達が祭司職をえたとしているのは、ほど前一七五年以降みられたエルサレムにおけるヘレニスト達の抗争と、それに続くハスモン家の台頭に至る政情を指すものとおもわれる。ここにみられるストラボンのユダヤ史は、ヘカタイオスからタキトゥスにいたるギリシア・ラテン作家と同様にモーセ後の諸時代が述べられていないことである。このことは反ユダヤ主義の風潮が広まるなかで、前二世紀にユダヤ主義護教の立場からデメトリオスやエウポレモスが『ユダヤの王達』、またアルタパノスが『ユダヤ人』といった著述をなしている<sup>38)</sup>が、しかし当時のギリシア人はそれらを殆ど読まなかったということが出来る。したがって、ストア派のストラボンにとって、理想化されたモーセ、その後迷信に導かれたユダヤ人の慣習といった、対極的な見方から、ユダヤ社会の衰退が指摘されることになる。キケロがユダヤ人の慣習を蒙昧と評し (Cic. Flac. 28, 66)、またタキトゥスがアンティオコス (四世)・エピファネスがユダヤ人の迷信を禁じ、彼らにギリシア人の慣習を与えた (Tac. Hist. 5, 8)、と述べたことに共通点が見出せるのである。

ストラボンのユダヤ論がポセイドニオスに負うと見る人々の論拠の一つに、いまあげたような理想的創制とその後における衰退、といった観点かポセイドニオスに由来すると論じていることである。確かにセネカは、黄金の時代といわれる時代の政体は賢者の支配下にあったが、それが墮落すると専制支配者が権力を掌握し、そして法の必要が生じたとするポセイドニオスの表現をあげている (Sen. Ep. 90, 56)。しかし、そうした衰退論は古くから広くみられ、政治形態に限ってみても、プラトンは国制の変化は免れないことを論じ、僭主独裁政を最悪としており、『国家』

54E)、またポリュビオスの政体循環論はよく知られた例である (Polyb. VI, 4, 5ff.)。

[38]—[39]の箇所、ストラボンが統治者としてのモーセの人格に関連する幾つかの例を論じている。ここでは二つの部分、つまり[38]と[39]の各節が連続しているように見受けられるが、しかし各々は異なったニュアンスを持っている。最初の部分では、まずギリシア人もバルバロイも国家を形成している点は同じであるとする。その共同体を維持するに当たって統治者は神の命に従うことがあるとし、その例としてゼウスから法を受け取ったクレタ人の王ミノス、デルポイの神託を受けた立法者リュクルゴスをあげている。なお、この箇所ではホメロスやエウリピデスの句などが引用されている。

[39]では予言者が論じられている。ヘレニズム時代に至る古代の占を知る主要典拠にキケロの『卜占論』がある。ここでは、占を予兆や自然現象などを利用する技巧的方法と、夢や靈感などからえられる自然的方法の二種類をあげている。そしてキケロによれば、後者をストア派は自然の摂理や因果関係を知る手掛りとしており、また彼らは神は未来を啓示するものであり、それは占によって知ることができることを論証しようとしたとする (Cic. Div. 1, 82-3)。おそらく、このような観点からストラボンは各予言者を列挙し、その一人にモーセをあげているのである。この見方は先述のヘカタイオスのモーセ観とはやゝ趣を異にしている。

[40]は[37]に続くユダヤ史であり、前二世紀末におけるハスモン家の王位宣言と、その後のポンペイウスのユダヤ征服を取り上げている。ストラボンはアレクサンドロス(ヤンナイ、前103—前76年)が祭司から王と称するようになったとしているが、それは彼の兄アリストブロス一世の時であろう。しかし前者の時期、ハスモン家の勢力はパレスチナにおいて最大となった。征服された多くのヘレニズム都市は都市組織を解体され、またヘレニズム化されていなかった地域ではユダヤ化が進められた。ハスモン家はヘレニズムの生活様式を受け入れたとしても、ギリシア人はこの支配者達をヘレニズム文明の破壊者とみなした。この点、ストラボンの見方も同様であった。そして、アリスト

プロス二世支配のとき、ポンペイウスのユダヤ征服（前六三年）が行われたのであるが、ストラボンはこの辺の事情をやゝ詳しく述べているのである。

### おわりに

以上において、ストラボンによるモーセならびにユダヤ人社会の論述と、それに関する要点を略述した。その際、ストラボンの資料について殆ど触れなかったのが、最後にこの点に関し、二つの問題をあげておきたい。

第一点は、ストラボンのモーセやユダヤに関する叙述がポセイドニオスからの引用であるとする見方である。確かにストラボンはパレスチナの叙述においてポセイドニオスの名をあげ、また私の時代最も優れた学者であると表現している<sup>90</sup>。それはともかく、ラインハルトの場合は、ストラボンのモーセ論に関し、モーセの神とはポセイドニオスの神であるとみている<sup>91</sup>。しかし、ここで拙論の要点をいえば、各地を旅行し、ユダヤ人の多いアレクサンドリアに滞在したストラボンが、宗教の発生事情とその展開を考察するに当たって、モーセとユダヤ教は格好の材料であり、それが彼のストア的観点から構成されたとみてよいであろう。

第二点として、ストラボンはユダヤ側から資料を入手しえたか、といったことが問題となる。ヘカタイオスとストラボンの叙述を比較するとき、後者に一層詳しい内容が加わっているわけではなく、むしろ従来からの定式的な叙述形態をとりながら、観点において相違しているのである。この点、ストラボンはヘカタイオスの叙述を参照したことも考えられる<sup>92</sup>。しかし、ストラボンがユダヤ側の資料を利用したとすれば、この場合、当時ディアスポラのユダヤ人のなかにはギリシア思想に暁通した者も多く、彼らのある者がストア的解釈に立ってモーセ像を紹介したとみることもできよう。この問題については紙幅の関係上、別稿に譲ることにする。

- (1) Strabon, I, 2, 34; II, 3, 8; VII, 3, 4.
- (2) Gager, J. G., *Moses in Greco-Roman Paganism*, (Nashville 1972), 35-37.
- (3) Stern, M., *Greek and Latin Authors on Jews and Judaism*, I, (Jerusalem 1976), 8-17, 47-52, 45-46.
- (4) Bekker, I., *Photii Bibliotheca*, I, (1824), 380-381; Cf. Burton, A., *Diodorus Siculus Book I*, (Leiden 1972), 1-34; Schürer, E., *The History of the Jewish People in the Age of Jesus Christ (175B.C.-A.D. 135)*, A New English Version revised and edited by P. Vermes and M. Black, II, 1, (Edinburgh 1986), 671-677.
- (5) 田中幸次博士の論文を参照。Joseph. C. Ap. I, 183; Cf. Stern, M., *op. cit.*, 21-22.
- (6) Gabba, E., The Growth of anti-Judaism or the Greek Attitude towards Jews, in : *The Cambridge History of Judaism*, II, ed. by D. Davies and L. Finkelstein. (Cambridge 1989), 625.
- (7) Jacoby, F., *Die Fragmente der griechischen Historiker*, III C, Nr. 609; Gabba, E., *op. cit.*, 633-636; Cf. Schürer, E., *op. cit.*, 595.
- (8) Gager, J. G. *op. cit.*, 31-32.
- (9) *Ibid.*, 32; Momigliano, A., *Alien Wisdom: The Limit of Hellenization*, (Cambridge 1975), 84.
- (10) Fraser, P. M., *Ptolemaic Alexandria*, (Oxford 1972), I, 690-697, II, 973-974, n. 123.
- (11) Stern, M., *op. cit.*, 108; Brodersen, I., *Abriess der seleukiden Geschichte*, (München 1989), 82.
- (12) Jacoby, F., *op. cit.*, II A, Nr. 87, F. 70; Jones, H.L., *The Geography of Strabo* (L.C.L.) ; Stern, M., *op. cit.*, 249-310, No. 115.
- (13) Reinhardt, K., *Poseidonios über Ursprung und Enthartung. Interpretation zweier kulturgeschichtlicher Fragmente*, Heidelberg 1928 (Orient und Antike 6), 5-34; RE XXII, 1, 639; Heineman, I., Poseidonios über die Entwicklung der jüdischen Religion, *MGWJ* 62 (1919), 113-121; Hengel, M., *Judentum und Hellenismus*, 3. Aufl., (Tübingen 1988), 469-472. (暁鏡社刊『ユダヤ教の歴史』) 田中幸次博士の論文を参照。1-26(3冊)° Cf. Gager, J. G., *op. cit.*, 38; Stern, M., *op. cit.*, 264-267.
- (14) Cf. Dadds, E., *The Greeks and the Irrational*, (University of California Press 1951), 102-134. (和田清次・水野一夫

- 訳『キリシマン人の非難状』を参考書房 一九七二年)。
- (8) Cf. Long, A. A. and D. N. Sedley, *Hellenistic Philosophers*, Vol. 1, (Cambridge 1987), 260-279; Vol. 2, 260-277. 山本光雄・日塚七郎訳編『後期キリシマン哲学者資料集』岩波書店 一九八五年、七七一―八三頁。
- (9) Gager, J. G., *op. cit.*, 42.
- (10) Stern, M., *op. cit.*, 134-136.
- (11) Jacoby, F., *op. cit.*, III C, Nr. 722, Nr. 723, Nr. 726; Holladay, C. R., *Fragments from Hellenistic Jewish Authors*, I: *Historians*, (California 1983), 51-91, 93-156, 189-243.
- (12) Strabon, XVI, 2, 43; XV, 10, 2.
- (13) Reinhardt, K., *op. cit.*, (*Ursprung*), 14. なおストアニホンの記述がホヤレニホスと負のユダヤ諸家の見解と異なるとして、M., *op. cit.*, 264-267; Kidd, I. G., *Posidonius*, II. The Commentary, (i), (Cambridge 1988), 331-332; (ii), 951-952. 以下の著述は、M., *op. cit.*, 302-323. (München 1983).
- (14) Aly, W., *op. cit.*, 196-198.